

# 山崎郷土叢

No. 72  
63. 9. 10  
兵庫県赤粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話 62-2000

## 近世初頭の山崎藩 (三十)

島田清

### 二、池田輝澄時代 (二十九)

#### ○ 奸佞の臣、菅友伯

人間は、容貌がさまざまであるごとく、性質も千差万別である。しかも、この性質は、この世に生をうけたとき、既に身につけているもので、その後の社会生活や教育によってたやすくかわるものではない。いな、いっそう助長され、よき方向であれ、よくな方向であれ、いちだんと發達し、四辺への強い影響を及ぼすものである。

「奸佞」ということばは、二つの要素を合せている。分けると、<sup>カバ</sup>「奸佞」というまでもなく、「奸」と「佞」だ。「奸」は、「よこしま」とも訓み、「道理を犯すおこない」を指す。また、「佞」は、「人

### 目次

①	近世初頭の山崎藩 (三十)	島田清	1
②	山崎六地藏物語 (奥国寺)	小野晋	7
③	地名小噺・院之馬場	資料部	8
④	埴尾神社の由緒について	〃	9
⑤	戸原物語 (二) 川戸の鐘銘	志水出世	10
⑥	春の旅日記	久保寅夫	12
⑦	武田信玄の舞台を訪ねて	安井清介	14
⑧	蔵書紹介 (二)		19
⑨	山崎藩札の紹介		21
⑩	役員変更のお知らせ		22
⑪	会報一号ノ三十号総目次		23
⑫	豊の国大分会員募集について		31
⑬	事務局だより		33

あたりがよく、「口先がうまいさま」、あるいは、「口先うまく人に取り入ること、おもねること」を指す。後者のような人は、「口さきだけ巧みで、人あたりはよいけれども、心の中はわからない」というのが普通で、「腹の黒い人」、「腹に一物をもつて接して

くる人”、何かをたくらむ人”など、さまざまなことばで表現される人である。

こうした人は、もちろん、人の上に立つことはできない。また、社会の上層にあって、人びとを指導したり、世を引っばってゆくこともできない。人望がないからである。そのかわり、主君に取り入ってその身の安全と昇進をはかり、権勢と欲望をほしのままにする術を心得ている。そして、それをたくみに發揮し、人びとをびっくりさせたり、世をひっくりかえしたりすることがある。ただし、この場合は、主君が賢明でなく、同僚にそれを押さえる手腕家がなく、同輩や先輩、または後輩に同志のあることが条件になる。池田輝澄の側近に召し出された菅友伯は、こうしたタイプの典型的な人物であった。

友伯の出世や経歴は、あまりはっきりしない。ただ、大阪城内で、秀頼に儒学を講じていたということが伝えられているだけだ。これが山崎藩主池田輝澄に仕えるようになるのは、叔母が輝澄の側室になっていた縁故によるもので、こうした例は、当時において、別段、珍らしいことではない。ただ、問題となるのは、友伯の性質——人となり・人がら——であって、召抱えるときに、ここまでの見透しができなかったというのが、不幸を招く原因となったのである。

池田輝政は、思慮周密、しかも、勇猛果敢をもって聞こえた武将である。その長男利隆は、輝政の正室、中川清秀の女が生んだが、性質・才能——これらを併せて「器量」という——は、輝政

に及ばなかったようだ。輝政の二男忠継より忠雄・輝澄・政綱・輝興と続く五人の男児は、いずれも、後室督姫（徳川家康の二女）

の出であるが、このうちでは、忠継が最もすぐれていたと思われる。しかし、未だ妻を迎えるところへ行かぬ十七歳でなくなってしまう（慶長二〇年）。代って家督をついだ忠雄も三十一歳で急死し、人間としての事業を伸ばす年令まで至らずに終わった。このあとが四男輝澄で、将軍家光に目をかけられ、駿府十八万石の城主に抜擢されようとしたけれども、この重要なチャンスに突然発病し、それをフイにしてしまった。もっとも、この間の事情はあまりはっきりしておらず、史料としてのこっているものも見当らぬ。したがって、推測を加えるしかないが、寛永八年（一六三一）出府を命ぜられて江戸下りをする途中、病を發し、江戸藩邸に着いても登城できず、幼い虎之助を名代として伺候させ、将軍より「七年は待つ。随分、養生せよ」と懇ろなことばをもらったところまでははっきりしている。ところが、その後のこ

表装全般

…古いものを大切に…

表具師

松本永春堂

山崎町鹿沢本通り  
TEL. 62-0122

とが、さっぱりわからない。すなわち、輝澄の病氣というのがどんなものであったのか、それが、どのようによくなったのか、また、ならなかったのか。幕府へのつとめはどうしたか。領内の施政はどうか、など、少しもはっきりしない。ただ、その後の推移を見ていて想察されるのは、次のようなことである。

1. 輝澄の病状は、その後、徐々に軽くなり、やがて、まずまずのつとめができるようになったらしい。発病当時、輝澄の名代として登城した虎之助は、『寛政重修諸家譜』に「夭折」と書かれているので、その後、数年のうちに死んだようだ。しかし、それに代るものを挙げず、輝澄も死んでいない。そして、そのまま推移しているのを見ると、輝澄の病状は、或程度回復し、將軍家へのつとめも、何とかできるようなったものと考えられる。

2. ところで、問題となるのは、その状態である。「もともとおりになった」、発病前とかわらぬようになった」というのであれば、まことに結構だ。しかし、後遺症がのこり、充分の働ができない、以前にくらべると、万事に鈍くなった」というような場合は困る。外見上、そのとき、そのときの処理ができていても、中心がしっかりしていないのでは、前後を誤したり、内外に不適切な処置が続発する。こんなとき、家老にしっかりしたものがあり、藩主の深い信頼と、藩士の絶大な尊敬を得て藩政を切りま

わすことになればいうことはない。これによってこの場をおさめ、やがて、次代の藩主へつなぐことができる。しかし、実際には、こんな理想的な状態は、なかなか得られぬ。第一、それほどの人材は、めったに居るものではない。一歩をゆずって、「あった」としてみよう。しかし、それを上下こそって、全幅的な信頼を寄せるか、どうか、疑問である。人間は、もともと泥くさい。貪らんな慾望のかたまりともいわれる。だからこそ、「克己」が求められ、「反省」が尊ばれ、「修養」を終生おこたらぬよう、注意されるのであるが、これを、文字どおり実行するものもまた、きわめて少ない。

こうした観点に立って、輝澄が発病し、その後、徐々に回復して行っている間の山崎藩をながめてみると、表面は静かで、何となく済んでいっているようでありながら、内面において、また、裏面において、恐ろしい泡がぶくぶくと発生し、それがしだいに渦となつてうねりはじめていた状況を想察することができる。菅友伯は、この中心に位置し、この泡をつきつきとつくり出し、渦をひろげて行った張本人である。

寛永八年、藩主輝澄が、突如、倒れてから後の推移を見ていて考えられる問題を、二つの箇条にまとめて述べたが、この時期における輝澄の活動が、史乘に、何ひとつあらわれてこないのは、

こうした考察の適切さを裏書きすることとなる。藩内の紀綱がゆるみ、藩士間に好ましからぬ行為や風習が芽生え、身勝手なふるまいが横行し、遂には刑事事件を引きおこすようになったのも、己むを得ないことである。発病後八年、山崎藩政の弛緩は、遂に、ここまで進んだ。

寛永十六年七月に起きた足軽同士の打擲事件は、いわば、氷上の一角であろう。これを契機に、藩政を引き締めようという改革が行われてもよいのであるが、そういうことを考え、実行しようという具眼の士はひとりもあらわれなかった。いや、この事件を最小限度におさめ、犠牲を少なくしようという行政上の考慮すら行われなかった。あるのは、自己の面目と利益、自派の結束と擁護であった。そして、これに裁きをつけ、まとめと引き締めを行わねばならぬ。藩主も、いつしか派閥の一方に引きこまれ、派閥次元の中に組みこまれる始末で、遂に、救いがたい状況に立至ったのである。菅友伯は、この間、常に中心に立ち、藩主をたくみに取りこんで、藩政を壟断した。正に、「獅子身中の虫」・「陰の大ベテ」である。箇条書にして、この経過を述べてみよう。

1. 別所六左衛門組下小頭が、六左衛門妻女の「ヘソクリ」だといって足軽たちに小銭の融通を始めた、ということ自体、健全な藩内では、ひんしゅくされることである。
2. このことが、石丸六右衛門・小川三郎兵衛など、他組の者へまでひろがったことは、綱紀の弛緩、士風の頹廢

を示す何よりの証拠である。

3. さらに、残金全額返還要求のもつれから、打擲事件（暴行・傷害事件）が起きたことは、このウミが逐に体外へ吹き出したわけ、迅速かつ的確な処断が、当然求められねばならない。
4. 物頭十一人が集

5. 上司に英明なものが居り、関係組頭に大義を弁（わ）かせる。また、おさめなくてはならないものである。ところが、事実は、これと正反対にひっくりかえされ

楽しいくらしのお手伝い

ホームセンター

# アザロ

**竜野店**

竜野市竜野町富永  
☎(07916)3-3226(代)

営業時間 AM10:00~PM7:00  
毎週水曜日

**山崎店**

宍粟郡山崎町今宿  
☎(0790)62-2434(代)

営業時間 AM9:00~PM7:00  
(定休日) 毎週水曜日



てしまった。この、「ひっくりかえそう」と考えた張本人が別所六左衛門その人である。すなわち、金を貸した側の組頭である。貸した方がえらくて、借りた方がそれより一段下だ、というようなことがいえるかどうか、現代の金銭感覚、あるいは貸借関係の実態からいうと、そう簡単にいいきれない面があるのではないかと思う。しかし、当時、すなわち江戸時代においては、いちおう、前述したごとき考えが持たれていたのではないかと思う。そう考えると、貸

した側と借りた側の出入り（騒擾）を、同列に処断されることは心が納まらないであろう。たとえば、「喧嘩両成敗の大法」があるにしても、心の隅に、不満がとぐるを巻いていることを、どうすることもできなかつたのである。別所六左衛門のこのと

株式会社  
安井書店

90山崎町山崎郡栗  
TEL山崎②0700(代)

きの心底をはかれば、正に、このとおりであったと思う。しかし、そのことはそうであったとしても、ここで、別所六左衛門は、グッとそれをこらえ、齒を喰いしなくても辛抱せねばならないのである。なぜならば、いやしくも、「喧嘩両成敗」は天下の大法である。武家社会におけるトラブルは、この大法に照らして処断されねばならないからだ。後年のことであるが、赤穂藩主浅野内匠頭長矩が、江戸城内松の廊下の刃傷事件で切腹を申付られ、相手の吉良上野介義央には何の咎もなかったことが赤穂藩士の憤激を買い、大石内蔵助良雄を首領とする四十七士が吉良邸に打入り、義央の首級をとって泉岳寺へ引揚げ、主君の墓前に供えた事件を、「士道の鑑」として広く賞賛されたのを見ても、この大法にしたがうのがあたりまえである。別所六左衛門という人物の思想や行動を知る手がかりは何ひとつ残っていないけれども、この行為から推測すれば、こうした士道の弁えや、儒学素養といったようなものは少しもなく、ただ、いたずらに、階級の上下にかかわり、金銭所持の多寡に心が走って、その観点だけから社会的優劣をきめようとする程度の人物であった、と思考される。しかも、この六左衛門が、いちじるしく我意我執の強い人物であったことは、こうした点の反省が少しもできず、いたずらに、この問題を、派閥のもつれにひっかけて受けとめている点から

察することができる。すなわち、六左衛門は、組頭十一人の協議による決定を、十一人の中に古参組頭が多かったことから、「古参派による新参派へのいやがらせ」、あるいは、「古参派による新参派の排除・圧迫」というふうには受取ったのである。精神面の修養、また、ものごとへの配慮を欠如した受止めかたであるけれども、しかたがない。六左衛門の脳裡には、何よりもさきに、派閥意識がきらめき、その色眼鏡でしか、ものごとを理解できなかつたのである。

一転して、現代社会をながめてみよう。ここにおいても、これと類似した派閥抗争は決して少なくない。物質文明の驚異的な発展に対して、精神世界の渋滞がいかにかひどいか、今も昔もかわらぬ実情を知ることができるであろう。

6. 別所・石丸・小川三組足軽の出入処断に対する不服を、別所六左衛門は、新参派の頭領である家老小河四郎右衛門にぶちまけた。四郎右衛門は、藩内に多数を占める古参派に対抗し、新参派を擁護せねばならぬ立場に居る。したがって、新参派藩士の申出することは、理非の如何より、現実の立場をよくすることに努めねばならなかった。別所六左衛門の場合も同じである。小河四郎右衛門は、十一人の組頭を呼んで、

「さきの決定をくつがえし、何とか、金を貸した方の

組頭が不満を持たぬよう——貸した方と、貸してもらった方を同列にして処断せぬよう——考えなおしてくれないか。」

家老として、こうした処置に出ているのか、どうか。また、このような申出をすることによって、さきさきの收拾をどのようにするつもりでいたのか、小河四郎右衛門のこのときの処置は、全く不可解といわねばならぬ。菅友伯は、このあとから事件を知ったことになっている。しかし、友伯

の加入によって、事件は一気に加熱し、エスカレートして天下の大事事件に発展するのである。重大な局面であるから、稿を改めて述べることにしよう。

最新型カラー現像機導入  
カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店  
良い品を・安く・安心して買える店  
Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**  
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089

# 山崎六地藏物語—興国寺の巻

興国寺住職 小野 晋

当寺には石の地藏尊が大小合わせ数体あって、そのうち代表的なお地藏様を一体山崎六地藏の一つとしてお祀りしている。寺には特に地藏尊についての記録はないし、又これという由諸話も聞かないので寺の歴史を紹介します。

## 興国寺の由来 観音地藏大師尊について

山崎町上寺の泰安山興国寺は、元長安寺と号し浄土宗であった。寛永十七年（一六四〇）十月十七日五万石を領有し、宍粟郡

主となった、松平周防守康映が山崎に入封してから数年後の正保元年（一六四四）松平氏の菩提寺として長安寺は創立された。康映が領主として在藩すること十年目に当る慶安二年（一六四九）の秋、康映は転封を命ぜられ、石州浜田（島根県）に移封された。その際住職も随従して長安寺も移された。後任には姫路城主であった待従池田武蔵守利隆の次男池田備後守恒元が三万石を賜わり山崎に入封した。元和二年（一六一六）六月十二日年三十三才で薨じた父利隆の菩提を弔らう為、前の藩主松平周防守が創建した長安寺の跡を復興した。

父の法諱である興国院殿に困み、寺号を興国寺と名付け、溪翁宗潜禅師を開山として勧請、宗派は臨濟宗妙心寺派となる。その後

元禄十五年（一七〇二）六月不慮の火災に会い、当寺の諸堂宇は一字も残さずことごとく灰燼に帰した。当時の住職は四世五代台道和尚で雄々しくも再建の雄図を抱き東奔西走、粉骨碎身刻苦辛酸の末ようやく寺院建立の大業を成しとげた。

楼門には泰安山の山号をしるした横額と本堂には興国寺の寺号をしるした横額があり、これは共に京都府宇治の黄檗宗の二世本庵禅師の筆である。楼門の横には西国三十三ヶ所順拝霊場の石碑が立っている。これは西国三十三ヶ所の霊仏を祀る為御堂を二世二代の住職が創建したのである。現在の山に、元治元年（一八六四）四月には十一世十二代の住職が観音三十三ヶ所を建立した。毘舎門及び拝殿、観音堂は昭和十二年（一九三七）に堂宇を篠の丸に移転している。

現在の本堂の南側には六体のお地藏さんを安置する地藏堂もあった。

しかし破損も甚しいために十三世盤山和尚の代に撤去し、昭和十七年（一九四二）十二月、四国三十三番霊場、地藏尊、大師尊をお祀りする為観音、地藏、大師堂を建立した。

そして山の上からおろして三十三番霊場の観音様と他に地藏尊大師尊を安置した。

前述の六地藏尊、他の一体の地藏尊も別に境内に安置してお祀りをしてある。

この寺の地藏尊は願いを聞いて下さる「お地藏さん」として古くから親しまれて、大勢の人のお詣りがある。

八月二十四日には昔から地藏盆の盆踊りが、境内で盛大に行なわれ近在から多くの人々が集まってきていた。

かつて境内には「いと桜」があり「興国寺のお庭のいと桜」と盆踊りの歌にまで歌われていたと聞いている。

## 地名小噺、院之馬場（犬の馬場）

### 資料部

昔西鹿沢より段地区に出たあたりを犬の馬場と言う。馬場が出

来たのは江戸時代の初期、松平石見守（池田輝澄）が元和元年（一六一五）此の地に封ぜられ、町造りを起した時で、その時此の処にあった寺院を尼ヶ端<sup>ねがは</sup>下に移し寺町とした。恩沢寺などもその寺の一つである。即ち寺の移転した跡を菅野川原に提防を築き其の下を馬場としたので、古くは院之跡馬場と言った。今も役場にある古い字切図によると、寺の前、寺の後、と言った字地名があり

寺院のあった事を証明している。併し松平周防守時代の慶安二年の地図を見ると馬場は城の下東の方に移し寺の跡には家老岡田竹右衛門の別邸が建てられ、そのあたりに家老与力衆の屋敷が描かれている。では犬の馬場という地名になったのは何時の頃からか、それはさだかではないが、地図によると城下に通ずる道の東にお鷹部屋があり、その北側門の内にはお鷹部屋がある。その昔、山

崎史談会の古老達の雑談の中に、お鷹部屋があるからには狺犬も飼っていたに違いない、（鷹も狺犬も飼育訓練はお鷹匠の仕事で

あったから）喧々轟々と

鳴く犬小舎のあった事から犬の馬場となったのではないかと言う人もあった、全くの推量である。

では松平備後守時代はど

うであったかと延宝年間

池田数馬の地図を見ると

馬場はやはり城の下堀の外側にあり、「桜之馬場」

と書かれてある。鶴木門

の外、土堤下には伊賀衆

の屋敷があり、門の外に

は惣門簡めの歩行屋敷が

点在しているのみでお鷹部屋はあるが犬小舎はどこにも描か

いない。私はやはり院の馬場と犬の馬場とは語呂が良く似て

からいつとなく次第に変わって行ったのではないかと思われる

し史談会連中の雑談には、いや、もしかしたら元禄の時代生類

みの令が出され、藩が犬舎を造りお犬様を保護したのではない

とか伊賀者は探索係として犬を飼っていたのではないかと又

には隠密自体忍の者の事をかけて犬と言ったとか言うに至っては

当推量も度が過ぎてゐる。勿論幕府の放つ黒鉄者や里隠れの隠密

は諸藩では確かに犬と言って警戒した事は事実の様であるが、

健康づくりの相談が気軽にできる店

# ごころ薬局

薬剤師

岸本八重子  
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790) 62-1190



の抱える探索係は奉行配下の「お同心」と言つて、（軽蔑はしなかつたし、）むしろ優遇していたようである。併し藩境の警戒は実に厳しく鶴木門にも、桜之馬場にも番所が設けられてあり、東鹿沢竜野口新門の番所から城の下は番士が常に動哨し、特に御殿下は城壁の下に犬走りもあつて夜間は犬を放して居た事も事実の様である。又鶴木門は別に惣門とも称し城下の村々の人々は此の門をくぐり通町を通過して土橋を出て町へ買物に出たので、家中の道では一番通行の賑やかな道路であつた。惣とは村全体をさす言葉で、惣門を出入する村人は、門番にいちいち理りを言つて通行したと古老は語つていた。勿論暮六ツ以後は閉門となるので夜間は余程急用の理由が無くては通してもらえなかつたと言ふ事である。今はその惣門のあつた事も知る人は少く、犬の馬場の地名も使われなくなつた。

## 埴尾神社の由緒について

埴尾神社（通称Ⅱ荒神さん）の社歴については古い記録はないが、明治十二年の「埴尾神社経王堂明細書」によると鎮座年代不詳とある。

藩主松平備後守時代（慶安年間）の絵図には埴尾谷という地名はあるが神社は見当らないので創建はそれ以後と考えられる。

境内に明治四十五年に建てられた石碑があつて、神社の由緒が

つぎのとおり書かれています。（原文のまま登載した）

本社祀宇伽魂命<sup>①</sup>福山稻荷神社<sup>②</sup>篠山東南麓<sup>③</sup>享保  
 年中山崎市内有荒物屋彦左<sup>④</sup>衛門者<sup>⑤</sup>肯<sup>⑥</sup>祀素<sup>⑦</sup>男<sup>⑧</sup>命干其  
 邸内一夕有<sup>⑨</sup>異<sup>⑩</sup>夢<sup>⑪</sup>乃<sup>⑫</sup>輿<sup>⑬</sup>本社合為二柱靈驗頭者里人崇敬  
 之老幼相謀伐<sup>⑭</sup>刑<sup>⑮</sup>栽樹木廣其境内領主本多肥後守政  
 成公持<sup>⑯</sup>境内地租而神威愈益<sup>⑰</sup>尊<sup>⑱</sup>鳥<sup>⑲</sup>後<sup>⑳</sup>經<sup>㉑</sup>數<sup>㉒</sup>十年樹木鬱  
 蒼境内自森巖<sup>㉓</sup>山<sup>㉔</sup>奇<sup>㉕</sup>地方一靈地也降明治維新之時官  
 割境内地一部以為國有明治十一年二月改因埴尾神社  
 修理祠宇造垣圍之其莊巖非復前日之比也時以境内狹  
 少為恨曾屬國有之地欲再復之社<sup>㉖</sup>掌<sup>㉗</sup>生野正隆信徒總代  
 塚崎寅七阪根榮次郎猪尾彌太郎久崎佐吉原平次郎荒  
 川源平馬場平助田淵半藏直島幸吉等諸官再三頗力至  
 明治三十八年十月七日遂被允信徒皆<sup>㉘</sup>伯<sup>㉙</sup>手慶賀於茲伐  
 老幹<sup>㉚</sup>朽敗者<sup>㉛</sup>之<sup>㉜</sup>以充本社維持之資更又補植樹苗謀  
 其繁茂永使神境不失尊嚴馬<sup>㉝</sup>乃建<sup>㉞</sup>碑<sup>㉟</sup>勤其梗<sup>㊱</sup>傳之干不  
 朽云

明治四十五年四月 後學 山下温齋謹撰

# 戸原物語(二) 川戸の鐘銘

播磨之西穴栗郡山府之南僅

餘半里揖水之東有川戸邑

群嶽立東北一水開西南溪

林之幽春採薇蕨江湖之深

秋釣魚鼈易千市纏以為恒

産屋舎百五十中有一戸名

総道場代寺為往詣之虎

世属當宗矣往昔傳台宗教

為書写山圓教寺支流其田

野中至今不開畝者有上之

坊等名而存者 其遺跡乎

然人皇百六代後奈良院之

御宇改汲龍谷流即天文五

年丙申六月中浣第二日龍

谷第十世證如上人辱賜真

宗本尊方便法身之画像六

字名號及蓮宗主寶章五通

且鄭重授一向專修之妙旨

法燈不絶凡二百七十餘年

播磨の西穴栗郡山崎藩邸の南僅わづか

半里(二キロメートル)余り、揖保川の東に川戸村有り。

多くの山々東北に有り。南西に開け溪たにや林かや幽

なり。春は薇蕨げんまいわらびを採り、秋は深い川や池で

魚や亀を釣り店に売り産をなす。以為おもひみる

に屋舎いえいえ百五十戸の中一戸総道場とて寺に

代わるものあり。当時の人々之によく往詣まゐる。

往昔むかし傳台宗の書写山円教寺の支流となる。

田の中に

今に至るも開かれていない上の坊と名づける所

があるが、それがその遺跡だらうか。

然しかるに百六代の天皇であつた後奈良院(一五二六)の御宇とき

改めて龍谷(真宗)の流れを汲む。それは天文五

年(一五三六)丙申六月十二日である。

その時證如上人より辱かたじけなくも真宗本尊即ち

方便法身の画像と六字名号なむあみだぶつのかほ 及び主宝章ご文章

五通且つ一向專修の妙旨も鄭重ていちょうに授け

られた

それよりも法灯消ゆることなく凡そ二百七十年



于今也曾有喚鐘一口惜哉  
年古而稍生 隙是以近世  
浪華某者改寄附一口及聲  
等故今為示將來不辭不敏  
聊勒其時曆且題此銘文云  
爾

一口難不言  
其聲能吠人  
于落花之夕  
于殘月之晨

享和二壬戌之冬

西光寺現住釋玄了謹識

願主 釋 常 念

世話人 戸 平 次

新 兵 衛

文 七

総 村 中

勅許御鑄物師當郡金屋住  
長谷川氏 藤原吉則作之

今まで于に曾こつてよく喚なる鐘一口有いつたが  
惜おしくも哉かな古くなり稍やすままな 隙あが生なじ是により  
今浪華おの某が改かめて一口寄付おをして  
くださる。今故こに敏さす程ちの辞こともないが  
この時を聊たのしんで勒きむものなり。且まに銘文を  
題して云うのみ

一口言わずといえども

その声よく人を泣かしむ

ここに花の散る夕べ

ここに月の残れる晨あした

享和二壬戌の冬（一八〇二）

これは川戸の鐘を金谷の長谷川氏が  
造り銘文を西光寺の往職が書かれた貴  
重な文化財です。三百三十日余文字、  
今より百八十余年前に書かれ鐘の製作  
も金谷でされたものでしょう。今も長  
谷川氏の辺りに鉾津が残っています。

戸原小 志水記

食品の店

い ま や

さつき通り4丁目  
TEL ⑥20169

## 春の研修旅行

久保寅夫

今にも雨が落ちそうな天候の中を、私達のバスは山崎を出発した。城下の町並みを過ぎると左側は揖保川の流れである。緑に映える河岸、煙る川面、新緑の候と旅行という心のやすらぎのせいかな新鮮な感じである。

竜野市を過ぎる頃から、ワイパーが左右に首を振り始めた。とうとう降り始めたか、窓外に眼を移すが窓がくもってぼんやりとしている、バスは山陽自動車道路に入る。窓の露を拭くと山の木々は、自然の色を誇るかのように雨にうたれて生々としている。新緑を眺めていると、心の落着きを覚える。

小雨に煙る道をバスは走る。蕃山のインターからブルーハイウェイに入る。蕃山は徳川時代の儒者態山蕃山が、岡山藩主池田光政に仕えて、この地に住んだ所である。山峡の静かなたたずまいの町である。暫くして備前焼きの窯場が見え、左の池の水の青さは、陶土の沈澱によるものと、ガイドさんの説明である。山が切れたとたんに、右側に片山湾の入江が見え牡蛎や海苔の養殖の筏が浮んでいる。波際の漁村は漸く眠りから醒めたようである。高さ三十メートルにも達する橋にさしかかる。左に片山湾が続き遠くに島が浮び日生の町が望まれる。一瞬にして橋を渡りやがて、

お久、虫明、牛窓などの耳新らしい地名の町が遠くに並ぶ。地名の由来など聞きながら、この辺を歩いたらさぞかし楽しい旅になるだろうと思った。邑久町には竹久夢二の生家があり、今は美術記念館になっている。バスからは生家の辺りが見られた。夢二の絵は、目と手に特徴があって、私の若い頃雑誌の挿絵や版画でよくみかけたものです。

室津に若い頃に住んだと聞いて、一人懐しく覚えた。

バスは吉井川の土手を右手に見ながら、岡山平野を走る。黄ばんだ麦畠が続く。吉井川を渡ると岡山市街、雨は静かに降り続くと旭川を渡って更に西へ、早く起きたせいかやゝ眠気をおぼえる。ふと、旅とは何んだらうかと思った。昔の人の旅と私の旅とは違うのか、昔の人は旅人でなくて旅行者ツーリストである。目的地だけ興味の対象で、途中の風景について歓心を示めさないのが普通である。遠くに過ぎ去って行く風景、流して見逃してゆく風景、れらも旅の中であるが、私達は眠っているか、隣りの人と駄過しているかの旅である。昔の人は一步一步、歩いて道々に語りながら、心にくい入る程みつめ、心に湧いてくる感動索の対象としたにちがいない。今の旅行は余りにも思索と感ない旅である。などと思いに耽っている間に本四連絡道路に南下している。児島市に入る。この辺は全国でも有名なジーパの産地で工場が並んでいる。児島インターチェンジを過ぎると鷺羽山トンネルである。このトンネルは四ツ目トンネルで丁度眼鏡を上下に重ねた形で、一階は複線の在来線、本四備讃線のトン



ネルと、新幹線トンネル。二階は上下線が夫々独立した、瀬戸中央自動車道トンネルである。トンネルを出ると、目前に瀬戸大橋の巨大な橋梁が迫る。私は息をひそめて、暫くは声も出なかった。備讃瀬戸の青い海、大小さまざまな島々の点在が目に入る。雨は止んでいたが、ぼんやりと曇った遠景は、はっきりしない。高く、低く、低く高く両側に張られたロープが動く、目下に白く航跡を残して行き過ぎる船、浮ぶ大小の島々、

瀬戸内海国立公園の世界に誇る景観が展開する岡山、香川両県境である下津井大橋から櫃石島橋、岩黒島橋、与島橋、北備讃瀬戸大橋、南備讃瀬戸大橋を渡る。南備讃大橋は、この中で、最大の大橋で、海上六十五メートル以上の高さを確保した位置に架けられ、主脚の位置は水深三十二メートル、その高さは一九四メートルに達するという。世界に冠たるこの吊橋、ただ驚嘆と感激の心で一杯である。架橋提唱から、百年、調査開始から三十年の歳月と、一兆円を超える工事費、延八百四十万人にのぼる橋男の熱情を、未来にかけて完成したこの大橋を車はことなげに走る。

大橋を過ぎ坂出市から丸亀市に向う。丸亀市は、城祭りで沢山の人が出で、駐車場が無く路上に停る。車を降りて五分位で城内に入る。

拡声器が鳴り立っている。城内に入ると間もなく、左側に門がみえ、右側は扉の勾配ともいわれる大石垣が、天に向って孤を描いて反りかえっている。まさに石垣の芸術品である。急な見返り坂が新緑のトンネルの中に続いている。古びた石垣にからまる蔦

を右にしなから天守閣に向う。途中カメラの撮影会のモデルの美女に心を引かれながら登ると、楸形の広場に出る、三層の天守閣が広場の上に聳えている。天守閣は小規模であるが、二層目の南北に唐破風、三層目には東西に千鳥破風、しかも大前に面した北側の格子付大窓の意匠は、実に美事である。設計者の苦心の程が偲ばれる。天守閣に登って、丸亀市街や瀬戸の海を眺めるが、瀬戸内海は矢張り曇ってぼんやりとしている。

丸亀城を後にして、善通寺に向う。讃岐平野を南へ、この辺は海池が多い。ガイドさんの説明では一八〇〇個もあり、その最大なもの空海の造った万濃池である。讃岐富士、象頭山、五岳山、が遠くに見える。善通寺の駐車場から、済世橋を渡って境内に入るとすぐ御影堂に詣でる。見学時間が限られているので駐車場に向った。善通寺の門前町も五重塔、食堂、仁王門、の見学が出来なかったことは残念であった。

私達は帰路につき、途中で昼食を摂った。大橋開通記念に竣工したタワーに入って、エレベーターに乗って展望台に着いた。墨絵のような島々がぼんやりと浮んでいる。曇り空の瀬戸内海の景観は、はっきりしない。タワーを出て愈々帰路につく、再び瀬戸大橋を渡った。世紀のこの大事業に驚くと共に、橋脚の島々の人々に感謝しながら山崎にと心は急いだ。

# 武田信玄の舞台を訪ねて

安井清介

前回会報創刊三十周年記念号に随筆「大河ドラマと武田信玄」を載せていただきましたが、その中で学校厚生会の春季教育研修旅行「武田信玄の舞台を訪ねて」の参加について皆様にお知らせすることを申し上げておりましたので次の旅行記を書きました。

三月二十七日（日）午前七時、新大阪駅に集合になっておりましたので、近畿ツーリストのご高配にあずかりJR新大阪駅の近くの「チサンホテル新大阪」に前夜から宿泊いたしました。寝つかれぬ夜が明けて午前五時頃から起床し、六時頃新大阪駅へ行つた。学校厚生会の清水団長、佐井添乗員、近畿ツーリストの池本氏が見えて参加者三十六名（男一〇名、女二十六名）の結団式があった。宍粟郡からの参加は自分一人だったが、神戸市から横野龍夫氏（城下金谷出身）夫妻と西脇市から西山氏が参加していた。七時半頃駅構内の喫茶店が開いたので軽食をとった。

新大阪午前八時発の「こだま四〇六号」で出発した。静岡へ十時四十三分に着いて東海バスに乗った。十一時頃静岡を出発して日本武尊の草薙剣で有名な草薙という所を通り、静岡県内ではバス路線の横も山裾もすべて茶畑だった。銘茶直売所も多く見かけた。静岡県は全国お茶の五十%の生産量の五万トンということだ

った。静岡市から清水市に入り国道五十二号線を北上して十二時四十分頃、身延山久遠寺の山門前で下車した。久遠寺は日蓮宗総本山で日蓮上人が開いた根本道場です。身延山の中腹に位置しています。ロープウェイで一五三米の山頂にある奥の院へ参拝した。雪が二十糎程積っていた。

久遠寺を出発して六郷町にある六郷印房を見学した。房主林成利氏から印章についての講話を聞いた。

下部温泉の下部ホテルへ五時前に到着したが、休む暇も

時から洋風の広間で山梨

県教育委員会の未木とい

う女の講師さんの武田信

玄に関する講話を聞いて

資料をもらった。武田信

玄が領内の各地に湧く効

能の高い湯を負傷兵たち

の治療に利用して野戦病

院としての機能をもって

いた。これを敵方に隠し

ていたのが「隠し湯」と

呼ばれるようになった。

信玄の隠し湯として知ら

# 山陽 盃

清酒

SANYO HAI

温泉の他別表のように山梨県、長野県内には多く残っております。

信玄の隠し湯として知られている温泉		
温泉名	所在地	含有物及び効能
下部温泉	山梨県西八代郡下部町	単純泉 胃腸病、傷、やけど、打ち身
川浦温泉	山梨県山梨郡三富村	水素イオン・ラドン リウマチ、神経痛 外傷性障害
湯村温泉	山梨県甲府市湯村	ナトリウム塩化物泉 神経痛、筋肉痛 うち身、慢性消化器痛、疲労回復
増富温泉	山梨県北巨摩郡須玉町	ラジウム 皮膚病、胃腸、肝臓病
西山温泉	山梨県南巨摩郡早川町	食塩泉
田野鉦泉	山梨県東山梨郡大和村	硫黄泉 胃腸病、神経痛
嵯峨塩鉦泉	全上	重炭酸泉 胃腸病、打ち身、切り傷
毒沢温泉	長野県下諏訪町	酸性含鉄、アルミニウム、硫酸塩、冷鉦泉 胃腸疾患、神経痛、リウマチ、皮膚病、火傷、切傷
白骨温泉	長野県南安曇郡安曇村	炭酸泉・硫化水素泉 胃腸病、神経痛 婦人病、皮膚病

翌三月二十八日（月）午前八時十分、下部ホテルを出発して斐崎の武田八幡神社に参拝した。境内には「風林火山」の旗が林

していた。末木先生が見えていて武田八幡神社の由来について

話があった。祭神は足仲津彦命（仲哀天皇）菅田別命（応神）

息長足姫命（神功皇后）および武田武大神の四柱です。この

に「わに塚」と称する小丘があり「日本武尊の王子武田王の

と語り伝えられており、武田王とはこの地一帯を開拓した氏

武田武大神として祀られた方である。武田の名はここに始ま

といわれている。嵯峨天皇の弘仁十三年（今から一一六六年

勅命によって、九州の宇佐八幡をここに移し、土地の神と併

って、武田八幡宮と称しこの地を宮地と名づけた。その後清

皇の時、京都の石清水八幡を社中へ勧請し、源氏の崇敬する

ろとなったが、信義の時となってとくに神徳に感じて、氏神と

ぎ武田をもって家の名とし、この郷一帯を寄進して崇拝した。

の後四百年を経て信玄は本殿を再建した。本殿は天文十年（今

ら五四一年前）武田信玄が二十一才にしてすでに甲斐の全土を

中におさめ、父信虎を駿河に隠退させて、さらに国外に勢力を

ろうとする年、まず氏神である武田八幡の本殿を再建したもので

あって、三間社流れ造り、檜皮ふきの建築様式で国重要文化財と

なっている。

次に新府城跡を見学した。武田勝頼が甲府つっじヶ崎館から府

をここに移したので新府といわれ、勝頼はわずか九十余日ここ

を去り滅亡の道をたどった。城跡は国指定史跡で新府城跡見取図

を去り滅亡の道をたどった。城跡は国指定史跡で新府城跡見取図



の看板が建てられていた。

石和の「葺屋敷」で昼食して大きい「ほうとう鍋」を四人で囲んだ。午後は武田信玄誕生の寺、積翠寺へバスを降りてしばらく急坂を歩いてあがった。ドラマではこの寺へ湖衣姫をつれてきて八重が湖衣姫に饅頭を食することを勧めお付きの乳母「たき」がこれを阻止するシーンがありました。「たき」は五月八日放映のドラマの中で殺害され勝頼は危うく難をまぬかれる場面がありました。臨済宗妙心寺派の寺で信虎の妻（大井夫人）が要害城へ避難する時、この寺で武田晴信を生んだと伝えられており、境内には産湯の井戸や産湯天神、武田不動尊が祀られている。天文十五年（一五四六年）晴信は京都から三条実澄と四辻季遠をこの寺にむかえ倭漢連句の会を催した。その一卷が今も寺宝として残されており眼の前に出して見せていただいた。最初に晴信の句が書かれていた。

積翠寺から甲府武田館跡の武田神社に参拝し、宝物館を拝観した。永正十六年十二月二十日甲府盆地を一望できるつつじヶ崎に館を移し、甲府を開創して以来武田三代六十余年間、政治経済の中心とした。現在の武田神社がその館跡で国の史跡となっている。大河ドラマ「武田信玄」ブームで神社の前は全国からの観光バスがひしめいていた。

次に甲州善光寺へ参拝した。信濃の善光寺と同じような立派な楼門と本堂が建っていた。武田信玄が川中島で上杉謙信と対陣のあと、戦火が長野善光寺におよぶのをおそれて佛像を甲府に移し

永禄元年（一五五八年）この甲州善光寺を建立したもので金堂は東日本最大の木造建築物です。

甲府市から塩山市の武田信玄の菩提寺、恵林寺へ参拝した。楼門の右に「安禅不必須山水」（安禅必らずしも山水を須いず）左に「滅却心頭火自涼」（心頭滅却すれば火自から涼し）の有名な額が掲げられていた。天正十年織田信長の大军により恵林寺が包囲され、焼き打ちによって全山ごとく灰燼に帰した際、炎上する三門楼上で唱えた快川和尚の有名な遺偈です。この寺も積翠寺と同じ臨済宗妙心寺派です。名僧夢窓国師により建立された庭園で優雅な庭園は国の名勝で、しばし立派な庭園を賞で旅の疲が癒やされる想いをし、庭園にはまだ残雪が見られました。武晴信の墓所、武田家臣の供養塔などもありました。

今晚も「信玄公の隠し湯」笛吹川溪谷、川浦温泉の「山泉館」に宿泊しました。泉温四十六、七度で露天風呂もあり飲用のプで食前にミネラルウォーターを飲んで体もすっきりこんなに出合った温泉に棚ぼたの感じがいたしました。

三日目は朝から雨ふりになっていた。八時に山県館を出発

勝沼大善寺へ向かった。勝沼の町の両側はどこへ行っても畑で甲州ぶどうのメッカです。真言宗智山派柏尾山大善寺は時代僧行基によって建立された寺です。鎌倉時代に建造された宝建造物の薬師堂（本堂）へあがって若い感じの良い坊さんか、説明を聞いた。勝頼が戦いに敗れ落ちのびる時にこの寺に泊ったことを話されました。ここでも鶴亀に似せて配置された立派な石



庭を見ることができました。山中湖は雪降りて予定より時間が遅れた場合三島発の新幹線に遅れる心配があるということで雲峰寺の見学が割愛されたのは天候の為とはいえ残念でした。バスは途中チェーンを巻いて山中湖畔の昼食場所の富士急行旭日丘ドライブインへ行ったが、山中湖は雪の中に包まれて視界が悪かった。三日間富士山のまわりをぐるぐるまわっていたが結局富士山は見られなかった。十二時二十分山中湖を出発、御殿場インターから東名高速道で沼津インターへ、二時頃三日間世話になった東海バスを降りて新幹線三島駅で解団式があった。三島発二時五十二分「こだま四三九号」で新大阪へ六時〇八分予定通り帰着した。

このたびの旅行では甲斐の歴史を深く学ぶことができ一層興味深く大河ドラマを観ることができたことを有難く感謝しています。

郷土研究会に於ても今後このような二泊の研修旅行を計画し、会員の方々の研修と親睦を深めていただくよう役員会に於て十分検討されるよう要望したいと思います。



第1次～5次川中島戦争の概要 (12年戦争)

区分	時期	戦闘の特性	備考
第1次	天文22年8月 (1553)	(1) 8月下旬、更科郡布施（現在の篠井駅付近）で遭遇 (2) 信玄主力の決戦を回避、謙信、川中島南部に侵攻	謙信、川中島から帰来後、ただちに京都に行く。
第2次	弘治元年7月 (1555)	(1) 謙信－善光寺、信玄－川中島大塚に陣地を占領 (2) 両軍7～10月（中旬）犀川をはさんで対陣	信玄の政治工作の成功－ 謙信の武将北条高広の判乱
第3次	弘治3年8月 (1557)	(1) 信玄、川中島北部に侵攻、飯山城を猛攻 (2) 謙信、善光寺に出撃、信玄、決戦を回避	謙信、越後に帰かん後 信玄、再度川中島を回復→ 海津城を築く（永禄3年）
第4次	永禄4年9月 (1561)	(1) 謙信、信玄の不正を憎み、決戦意志をもって出陣 (2) 9月10日川中島八幡原で主力決戦を行う	両軍の損害大（死傷率） ・武田軍 62% ・上杉軍 72%
第5次	永禄7年8月 (1564)	(1) 8～10月（60日間）犀川をはさんで対陣 (2) 決戦せず自主的に兵力を撤収	以後、川中島は信玄が領有 するところとなった。

## 蔵書の活用について (其の二)

事務局

会報第71号に郷土研究会所有の蔵書を紹介し、皆様方にご利用をお願い申しあげましたが、第71号に続いて追加分をお知らせいたします。

書 名	著者又は発行所名	備 考
歴史手帳63年2月号より8月号まで	名著出版	
歴史と神戸 27巻1号 1. 神戸歌枕の歴史地理 2. 中世の山下氏 3. 姫路藩御船手組の軍容と戦役 4. 姫路藩好古堂教授伊藤蘭斎 5. 龍野の絵馬師と絵馬屋 6. 水利関係地名雑考 7. 「野々」という地名表現について	神戸史学会	
歴史と神戸 27巻2号 1. 明治維新と大阪の変化 2. 村島帰之の思想と行動 3. 新婦人協会の支部活動 4. 1945年5月11日の神戸空襲 5. 網干沖難船事件の一考察		
歴史と神戸 27巻3号 1. 近代地名の成立と幕藩体制下の地域構造 2. 加東郡内地名の二、三 3. 吉田茂樹「ひよごの地名」の二、三、について		

書名	著者又は発行所名	備考
民族文化第296号	滋賀民俗学会	
兵庫史幣史の研究 第6号～第8号	兵庫紙幣史編集所	
月刊真珠往来61年9月号	真珠通信社	
風土記研究第4号	兵庫教育大学 国文学研究室	
播陽万宝智恵袋 上巻・下巻	臨川書店	
旅心「旅と歴史と独り酒」	杜山 悠	
史譚「大説小説独り酒」	杜山 悠	
荒木又右衛門	杜山 悠	

### 蔵書の貸出しについて

- 一、郷土研究会の会員にはどなたでも貸出しをいたします。
  - 二、貸出しを希望される方は、事務局へ電話又は文章にてお申し込み下さい。
  - 三、貸出しは無料ですが、紛失または損傷の場合は相当の弁償をお願いします。
  - 四、貸出しは一回三冊以内といたします。
  - 五、貸出し期間は一ヶ月以内といたします。
  - 六、図書貸出簿に図書名、氏名を記入し捺印をお願いします。
- ◎ お問い合わせ
- 一、図書の寄贈をしていただける方は事務局へお知らせ下さい。
  - 二、図書購入のご希望がありましたらお申し出下さい。
  - 三、図書貸出しについてご意見、ご希望があればお申し出下さい。



# 「兵庫紙幣史編集所発行の『兵庫紙幣史の研究』に掲載された山崎藩札」

創刊号に兵庫の珍札紹介その1として紹介されたものと、第二号の「兵庫お札百話」にも山崎藩札のことが掲載されており、  
ので会報にてご紹介いたします。

## 兵庫の珍札紹介 その1

山崎藩の初期札は、銀10  
匁札と銀壹匁札の銀札と、  
錢壹匁札の銭札がある。共  
に墨書で、文政元寅5月と  
書かれている。その内、今  
回は銀10匁札の通用札を選  
びました。銀札10匁と壹匁  
札には未完成札が多く現存  
している。藩札図録の山崎  
藩の銀10匁も未完成札であ  
り、入手困難な藩札である。

山崎藩 銀拾匁 墨書 (図-3)



82%に縮小

事務局

兵庫お札百話 ① 隠し文字 (播磨山崎藩札)

隠し文字と言えば、昭和十三年に発行された富士桜五十銭紙幣の「ニホン」の文字は余りにも有名です。兵庫県下の尼崎藩・龍野藩・山崎藩などの藩札にも隠し文字が有ります。偽造札防止する意味から必要だったのでしょうか。判師の製作工程で独自の工夫の隠し文字を入れることにより、判師自身の技術を依頼主に示したのでしょうか。下記の藩札は、山崎藩文政元年の銀壹匁札表面頭部の「シソウツウヨウ」の隠し文字です。また、同藩文政元年の銭札にも「シソウツウヨウ」の同じ隠し文字があります。

外科・内科  
山 中 医 院

院長 山 中 陽 一

山崎町西町・TEL⑥20036

役 職 名	前 任 者	後 任 者
城下地区支部長		
蔦沢地区支部長		
研修部々員		
地区幹事(山田町)		
”(中鹿沢)		
”(春安)		
”(川戸)		
”(須賀・出石)		
”(五十波)		



# 山崎郷土研究会会報総目次

## 「会報」第1号

昭和33年6月1日発行

発刊の辞  
大きな期待を  
会報の発刊によせて  
ふるさと

歌の風土記

穴栗鉄について

殿様藪古墳調査報告

明治十年頃の物価

郷土史料解説(一)

伊和神社

会報 会員名簿

春季見学会案内

## 「会報」第2号

昭和33年10月1日発行

四睡庵素練  
史料採訪報告  
河東之伝説

島田清  
宇野正碓  
栗山宗知

篠の丸公園の由来

一宮町の虚空蔵大菩薩堂

史料「穴栗人名鑑」(一)

郷土史料解説(二)

永孝林記

本会視察旅行の思い出

『穴栗郡誌』発刊

会員募集 消息 会員名簿(二)

## 「会報」第3号

昭和34年3月1日発行

山崎高校地歴班

栗山宗知

安井俊二

安黒義郎

本多忠可と心学(上)

河東の伝説(二)

明源寺考(一)

史料「穴栗人名鑑」(二)

旧藩邸の写生図

蒼龍稲荷神社靈驗記

教信上人の墓と千草念仏の由来

穴栗鉄の販路

郷土史料解説(三)

会員名簿(三) 本会雑報 消息

## 「会報」等4号

入江静夫  
赤松円琳  
赤松円裕  
安井俊二  
安井  
福井政男  
島田清  
栗山宗知  
杉山よしあき  
赤松円裕  
堀口春夫  
春名荒太郎  
赤松円琳  
宇野正碓  
安井俊二

揖保川・高瀬舟聞書

史料「宍粟人名鑑」(三)

牛市之事

岸田屋所蔵の幕末記録

本会見学旅行記

郷土史料解説(四)

会報 消息 会員名簿(四) 後記

昭和34年7月5日発行

「会報」第6号

昭和35年2月1日発行

宇野正碓

赤松円裕

安黒義郎

安井寅一

福井政男

安井俊二

宇野正碓

栗山宗知

志水新次郎

赤松円裕

杉山よしあき

赤松円琳

安井寅一

安井俊二

「会報」第5号

赤穂郡内に於ける旧安志領の現況

続岸田屋の幕末記録

河東の伝説(三)

史料「宍粟人名鑑」(四)

明源寺考(二)

平瀬清正の手亡塚

お地藏さま縁起

天明年間の山崎要覧

あとがき 会員名簿(五)

山崎闇斎神社・蒼魂稲荷神社祭典案内

郡北見学探勝案内

昭和34年10月15日発行

小林楓村

安井寅一

栗山宗知

赤松円裕

杉山よしあき

赤松円琳

下村慶之助

安井俊二

「会報」第7号

消息 本会雑報 会員名簿(六)

郡北見学旅行記

郷土資料解説(五)

弁円の墓

明源寺考(三)

史料「宍粟人名鑑」(五)

山崎地区消防沿革

河東の伝説(四)

揖保川高瀬舟考(二)

昭和35年5月1日発行

宇野正碓

北 弥太郎

赤松円裕

肥塚義虎

栗山宗知

竹の舎老人

樽井貞彪

安井俊二

懐古風流こぼれ話

榎元氏の糸桜を見て

天保ききん小説

イロリーその民俗学的考察

史料「宍粟人名鑑」(六)

馬竹の奇談

揖保川高瀬舟考(三)

霜柿軒の辞(旧排人小森年足作)

郷土資料解説(六)



津山方面見学旅行案内  
会員名簿（七） 本会雑報

「会報」第8号

本多忠可と心学（中）  
樽井守城の軸  
弁円の墓（下）  
道標立石に讃す  
佐用・津山方面見学旅行記  
赤穂見学旅行案内  
会員名簿（八） 本会雑報

昭和35年9月1日発行

島田 清 岸田発掘古銭報告  
安井寅一 川田順氏より短歌  
赤松 円琳 天国剣の資料  
福井 生 郷土史料解説（七）  
横井 恕一 雑報

「会報」第10号

カマド  
唯一癖の趣味  
“安志姫” 雑考

昭和36年5月1日発行

肥塚 義孝  
福井 託次  
中村 潤  
山高地 歴班

安井 俊二

「会報」第9号

山崎町に還った闇斎像  
弁円の父  
山崎町新出土銅鐸調査略報  
三番目の銅鐸  
赤穂・室津見学旅行記  
文久年間の議定書  
消息 本会雑報 会員名簿（九）

昭和36年2月1日発行

和田 疎人 文久武鑑抜書  
杉山よしあき 鹿沢城と家中  
島田 清 天明七年書上本多家領地石高表  
安井俊二 わらべ歌？  
福井 政男 明治元辰年御滞京日誌  
本多家の俳人

「会報」第11号

本多忠可と心学（下）  
本多家

昭和36年9月 発行

島田 清

編集後記 雑報一束 会員名簿（10）  
本多古文書目録

安井 竹軒

宍粟郷土研究会

昭和37年2月1日発行

—阿部博士の大講演会—

建碑二基の除幕式

宇野正 碓

—闇齋先生ゆかりの地にて—

杉山よしあき

山崎闇齋奉賛会新発足

埋蔵文化財の取扱いについて

肥塚義 彪

あとがき

寄せ屋本

福井 託二

川田順歌碑のこと

安井 俊二

「宍粟郷土研究会会報」第14号

酒造古文書二つ

昭和37年9月1日発行

船越と千種（見学旅行記）

安井 竹軒

山崎闇齋の学問（二）

会員名簿（11） 雑報

揖保川高瀬舟考（五）

阿部吉雄（述）

「宍粟郷土研究会会報」第13号

昭和37年5月1日発行

宇野 正

山崎闇齋の学問

阿部吉雄（述）

会員名簿（12） 本会雑報

山崎闇齋の学統について

高田真治博士日本儒学史による

「宍粟郷土研究会会報」第15号

昭和38年2月1日発行

山崎家譜

宍粟俳壇の回顧

安井 竹

闇齋著作目録

安志藩略記

祖考の碑々陰記

小笠原家

闇齋儒学系図

安志藩主略譜

山崎闇齋神社の創建

安井 記

闇齋先生二百八十年祭

文久武鑑抄

小笠原氏系譜

安志藩石高表（嘉永三年）

安志谷探訪記

・山崎闇齋の学問についてお断り

鳥取見学旅行

馬医嘆願書

会員名簿（13） 雑報 後記

「穴栗郷土研究会報」第16号

昭和38年6月1日発行

山崎藩主池田政元の臨終（一）

往古の郷土

興国寺と木庵禅師

衣坂異聞

郷土会春季見学 尾の道旅行記

郷土資料解説（八）

紹介 会員名簿（14） 後記

「穴栗郷土研究会会報」第17号

昭和38年10月1日発行

穴栗郡の近世産業（一）

随筆 糸

平瀬長水に就て

宝塚方面見学旅行記

闇齋神社秋祭典と総会案内  
後記 会員名簿（15）

「穴栗郷土研究会報」第18号

昭和39年2月1日発行

穴栗郡の近世産業（二）

初詣

真説「夜泣石」

拓本のとり方

稲垣浅之丞

雑報 本会総会報告 後記

「穴栗郷土研究会報」第19号

昭和39年6月15日発行

島田 清

安井俊二

杉山よしあき

福井託二

「木の谷悲史」に現われた美玉・中島の最後

宇野正碓

島下八重子

島田清

安井寅一

穴栗郷土研究会

宇野正碓

安井寅一

堀口春夫

肥塚義彪

安井俊二

生野拳兵解説

略歴

美玉事件届書

美国神社春季祭典

穴栗郡の近世産業（三）

妹尾家古文書類寄贈

宇治方面の見学旅行

会員名簿（16） 雑記 後記

宇野正碓

島田清

安井寅一

安井寅一

安井寅一

安井寅一

安井寅一

安井寅一

安井寅一

「宍粟郷土研究会々報」第20号

和歌の三秀

宍粟郡の近世産業（四）

本多忠隣時代 馬揃上覧の記録

東播地方の見学旅行

会員名簿

宍粟郷土研究会々報総目次

昭和39年10月20日発行

安井 俊二

宇野 正 碓

安井 記

いつたえ

四睡庵素練著 俳諧三音鳥（続）

郷土だより

会員名簿（18）

春季見学旅行

栗山宗知

「宍粟郷土研究会々報」第21号

郷土史と人づくり

億計王・弘計王物語の伝流

柏野の池普請

四睡庵素練著 俳諧三音鳥

本多記念館移転

後記

昭和40年2月10日発行

安田 青 風

黒田 義 隆

小林 楓 村

松平康映時代の分限帳（下）

明治元年本多藩滞京日誌

本多家武具書画目録

秋季見学旅行記

会員名簿（19）

郷土だより あとがき

昭和40年10月10日発行

島田 清

「宍粟郷土会会報」第22号

松平康映時代の分限帳（上）

山崎闇斎の門弟

白い壁

昭和40年6月10日発行

島田 清

杉山よしあき

福井 託 二

「宍粟郷土研究会報」第24号

四国巡拝の悲劇

随筆 青蓮寺

郷土山崎礼讃

鴻野考

資料（兵庫県史料）

山崎町ト唱フル場所御届

明治元年本多藩滞京日誌（三）

昭和41年2月10日発行

黒田 義 隆

島下 八重子

福井 託 二

安井 俊 二



山崎町郷土館の建設にあたりて  
雑報 会報

安井 淳三

「宍粟郷土研究会報」第27号

昭和42年4月1日発行

「宍粟郷土研究会報」第25号

昭和41年7月20日発行

千草鋼と長船鍛冶

— 備前景光・景政の場合 —

庄 堺

宇野 正 碓

宍粟鉄山の経営者 (一)

宇野 正 碓

平瀬長水の『射学要録』

島 下 八重子

明治元年本多藩滞京日誌 (四)

兵庫県史料

島 田 清

山崎郷土館等竣工

予告 雑報 会員名簿 (22)

大庄屋交替

栗山 宗知

淡路見学旅行記

安井 寅一

「宍粟郷土研究会報」第28号

会員名簿 (20) 雑報

昭和42年8月20日発行

平瀬長水の『射学要録』 (三)

島 田 清

「宍粟郷土研究会報」第26号

昭和41年11月20日発行

前野道素翁を想う

安井 寅一

宍粟鉄山の経営者 (二)

宇野 正 碓

風月集と素練

福井 託二

観音堂の絵馬

岡山見学旅行記

雑報 会員名簿 (23)

— 桑田四郎右エ門氏常のこと —

堀口 春夫

平山騒動覚書

栗山 宗知

平瀬長水の射学要録 (一)

島田 清

「宍粟郷土研究会報」第29号

但馬見学旅行記

昭和42年11月20日発行

郷土だより

宍粟鉄山の経営者 (三)

宇野 正 碓

哀悼横井恕一氏

随筆 生ける珠

島 下 八重子

会員名簿 (21) 雑報

黒田官兵衛と山崎

中村 潔

風月集と素練（二）

天の橋立秋季見学旅行

総会案内 雑報 会員名簿（24）

「宍粟郷土会報」第30号

千七百年前の播磨の国

歌と句の人 妹尾正孝

風月集と素練（三）

千種たたら跡発掘

総会報告 雑報

多淵健次

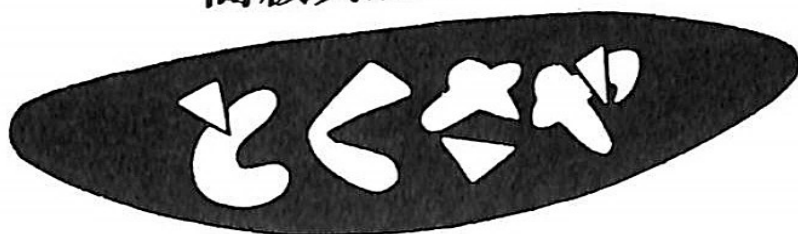
昭和43年4月10日発行

杉山よしあき

安井寅一

多淵健次

創業嘉永元年 きものと共に130余年  
高級呉服の専門店



山崎町本町（さつき通）  
☎（0790）62-1680代

# 豊の国「大分を愛する会」の入会について

昨年、信州一泊旅行を実施いたしましたでしたが、予想外に多数の方々が参加され史蹟、名勝を訪ねたいと希望される方が多いことがわかりました。大分県観光協力が企画しています「大分を愛する会」に私は個人的に昭和六十二年一月から入会いたしております。既に昨年の旅行に参加された方々には勧誘いたしましたして現在入会を希望されている方は約六十名ありますが、全会員の皆様にお知らせいたしますので入会ご希望の方は十月十日（月）までに事務局へお申し込み下さい。

この会をお奨めする理由

1. 入会費及び会費等は一切ありません。
2. 入会すれば全員カードがもらえます。  
（個人で旅行する場合も使えます。）
3. 大分県内の観光施設の入場料、入館料、拝観料、乗車料等が一割引になります。
4. アンケートに答えてプレゼントがあります。
5. 大分県は国東半島に数多くの史跡があります。  
熊野磨崖仏・富貴寺・真木大堂・長安寺・羅漢寺・杵築域・宇佐神宮等々  
南の方には白杵石仏群・風蓮鍾乳洞・岡城跡（荒城の月）等

々もありません。

6. 大分県は日本三名湯の一つ別府温泉・鉄輪温泉・湯布院温泉  
観海寺温泉・明礬温泉・宝泉寺温泉・筋湯温泉・法華院温泉  
等々があり旅の疲れを癒やすのに最適の温泉天国といえます

7. 新幹線又は観光バスで二泊三日の旅行ができます。

今年七月十四日（木）午後十時四十分からNHK国宝への旅「ほとけの里、大分国東半島」が放映されました。作家井出孫六氏が九〇〇年前に建立された富貴寺大堂（本尊阿弥陀如来座像。壁面には阿弥陀浄土変相図）熊野磨崖仏（大日如来、不動明王）を訪ねていました。

郷土研究会とこの会の関係について

- 一、この会の入会は郷土研究会の会員の中で自由意志によってしていただきます。
- 二、入会及び退会は何時でも個人の自由です。  
但し、入退会時には事務局へお知らせ下さい。
- 三、研修部は従来通り春、秋二回の日帰り又は一泊の旅行を計画いたします。
- 四、この会は郷土研究会の会員の中で自由意志による旅行同好の会です。
- 五、研修部の旅行とは別個に二泊三日の旅行を計画いたします。  
今後の構想について  
一、「大分を愛する会」 Lets Love OITA 略称LLOに入会  
いたしますので、大分県の史蹟、名勝を訪れることは勿論で

すが、視野を広めて Lets Love JAPAN とし可能な  
範囲の史蹟、名勝を訪ねます。

近い将来にはリニア新幹線が開通し、東京・大阪間も一時  
間で結ばれる時代になります。

二、年一回は二泊三日の旅行を実施します。

入会について

一、入会を希望される方は事務局備え付けの申込書にご記入下さ  
い。電話による申込みも可。

二、会員カードの請求は事務局から一括していたします。

三、会員カードが来ましたら個人にお渡しします。以後は大分県  
観光協会から個人宛に案内が来ます。

但し、事務局で一括保管を希望される方は保管し、大分  
県への旅行の時に使います。

備考

。大分県観光協会からはこの企画についての了解を得ております。  
。時期的に六十三年度は実施できるかどうか不明です。十一月中  
か来春四月上旬頃になるかも知れません。

事務局長 安 井 清 介

本のある生活を—

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3  
☎(0790) 62-4674



旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

 **神姫観光**

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68  
(神姫バス山崎待合所内)  
FAX (0790) 62-7589

## 事務局だより

- 一、秋の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。
- 二、会報を皆様方の広場とする為、会員の皆様方の日頃の所感、随想、旅行記等原稿を事務局宛お送り下さい。

(山崎郷土研究会事務局)

山崎町

安井清介宅